

# 窓の内と外

小川未明

青空文庫



白しろと黒くろの、ぶちのかわいらしい子こねこが、洋服屋ようふくやの飾り窓かざりまどのうちに、いつもひなたぼっこをしていました。そのころ、政一せいは、まだ学が校こうへ上あがりたてであった。その店みせの前まえを通とおるたびに、おもちやのねこがおいてあると思おもっていました。ところが、ある日ひ、そのねこが起おき上あがって、脊せのびをしたので、

「おや、生いきているのだな。」と、びっくりしました。

ねこを好すきな政一せいは、それから、この洋服屋ようふくやの前まえを通とおると、かならず店みせのうちをのぞくようになりましたが、太陽たいようの当あたらないときは、ねこの姿すがたを飾かざり窓まどでは見みませんでした。

月日つきひがたって、いつしか政一せいは、上じょう級きゅう生せいとなりました。

彼は、また釣りが大好きなので、祭日や、日曜日などには、よく釣りに出かけました。だれでも、子供の時は、魚釣りが好きなものですが、政一ときては、日に、二、三回もいくようなこともめずらしくなかつたのです。それは、川がそう遠いところになかつたからでありましょう。片手にブリキかんをぶらさげて、片手にはさおを持ち、いつも帽子を目深にかぶつて、よくこの洋服屋の前を通つたのであります。

そのころは、とつくに、ねこがいなかつたから、彼は、ねこのことなど忘れてしまいました。ただガラス窓にうつる、彼の姿が、学校へ上がりたてのころから見れば、おどろくほど大きくなつていました。思い出したように、彼はまぶしい空を見上げたが、

釣りのことよりほかには、なにも考えていませんでした。

このとき、店のうちで、眼鏡をかけて仕事をしていたおじいさんは、じつと少年の姿を見送っていました。

「あのお子さんも、大きくなったものだ。しかし今日は、風向きがおもしろくないから、釣りはどうだかな。」と、おじいさんはひとり言をしたのでした。

政一のお母さんは、よくこの店へきて、政一の洋服の修繕をお頼みになりました。ちようど、その日の晩方のことです。いつものように、お母さんは、洋服屋へこられて、こんどは、政一が、新学期から着るための新しい服を、お頼みなさつたのでした。

「いままでののは、もう小さくなつて着られなくなりましたから、新しいのをこしらえてやろうと思ひます。」と、お母さんは、おつしやいました。

これを聞くと、おじいさんは、にこにこしながら、

「きよう、坊ちゃんがおもて、前をお通りになりましたが、釣れましたか。しかし、よく私の直してあげました服を、こんなになるまで我慢して着てくださいました。感心なことです。何ぶんせんご分戦後で、品物がなからすから。」と、おじいさんが、いきました。

「このまえ、こんどこれが切れたら、新しくなさいと、念を入れ修繕してくださいましたおしりのところが、こんなに破れまし

たし、それに、きゆうからだ急に体が大きくなりまりましたので、あたらし新しくこしらえてやろうと思おもいます。」と、お母かあさんも笑わらつて、お答こたえになりました。

おじいさんは、鼻はな先さきから、眼鏡めがねをすべり落おちそうにして、うなずきながら、

「坊ぼっちゃんが、あんなに大おおきくおなりですもの、自じぶん分とは年としをとつたはずだと、つくづく思おもいましたよ。」

おじいさんは、さらはなしに、話はなしをつづけました。

「私わたしも、子こども供ものときは、なにより釣つりが大だい好すきでした。それですから、いまでも、釣つりざおを持もつていく人ひとを見みると、しぜんに癪くせで、空そらを見みるのです。ああ、今日きょうはだいじょうぶだ。今日きょうは、風かぜ

がおもしろくないと、つい、自分のことのように考えるのです。  
仕事しごとをするようになって、もう何十年なんねんも川かわへいきません。けれど、  
こうしてすわっていても、昔むかしを考えると、楽たのしかった日ひが、目めに  
浮うかんできます。」と、おじいさんは、政一せいのお母さんかあに向むかっ  
て、話はなしました。

この日ひ、政一せいは、おじいさんのいったように、わずかに小ちいさな  
ふなを二匹ひきと、えびを三匹びきつ釣つったばかりでした。夕飯ゆうはんのとき、  
お母さんかあが、おじいさんの、今日きょうの話はなしをおきかせなされると、  
「たまには、おじいさんも、釣つりにいけばいいのに。」と、考かんえ  
て、政一せいは、こういいました。

「それが、つきつきに、お仕事しごとがあつていけないのだそうです。



おまえの、いま着ている服も、どれほどおじいさんのお世話になつたかしれません。おじいさんだけは、直しものでも、けつしていやな顔をせず、かえつて、こんな時節だから、着られるだけ我慢なさいといつて、喜んでしてくださるのですよ。」と、お母さんはいわれました。

政一は、お母さんの口から、こうはじめて聞くと、おじいさんが、自分の好きな楽しいも犠牲にして、他人のためにつくしているのを知りました。そればかりでなく、政一は、自分の着ている服も、幾人かの手によつてつくられたのであつて、この世の中のこと、なにより一つ、ひとりの力だけで、できるものないことを悟つたのであります。

かれ  
彼は、まいにち、だまって仕事をしている人々に、真に感謝  
の念ねんがわいたのであります。

# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「僕の通るみち」南北書園

1947（昭和22）年2月

※表題は底本では、「窓《まど》の内《うち》と外《そと》」  
なっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年12月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 窓の内と外

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>